

せんそうについて 考えた

岡山市・ノートルダム
清心女子大付属小2年

荒井 生

「あっこいのぼりだ。」ぼくは、新聞のしゃしんに目がとまり、きじを読みました。それは、せんそう中のやけ野原でこいのぼりをよるこぶ子どもたちの白黒しゃしんを、人こころのう（AI）でカラーかしたものでした。東きよう大学の先生が、せんそうを自分のこととしてかんじてほしいと、とり組んでいるそうです。しゃしんの色づけはAIの力だけでなく、せんそうを体けんした人の話を聞いて、それをもとに時間をかけて人の手で色を直していくそうです。はじめはせんそう中のしゃしんには見えなくて、ぼくはせんそうについてもっと知りた

くなりました。

ぼくは、おかあさんから岡山でも空しゅうがあったことを聞き、岡山シティミュージアムへしらべに行きました。てんじを見て、ぼくの家のあたりもやけ野原になり、たくさんの人がなくなったことを知りました。でも、なによりせんそうのおそろしさが分かったのは、せんそう体けんのお話のどろがです。ぼくはいつまでもそのどろがを見ていました。

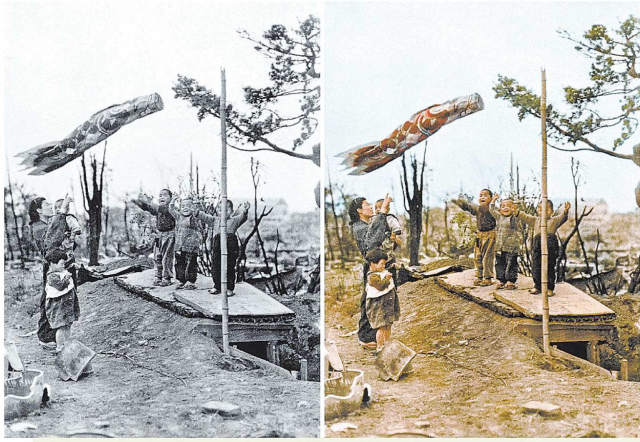
ぼくが行っているカトリック教会に、岡山空しゅうを体けんした人がいると聞いて、インタビューをしてみることができました。その人は石川やさぶろうさんといい、5才の時に空しゅうにあったそうです。家ぞくとはぐれて、3才の妹をつれて二人でにげたと書いていました。船であさひ川をわたって後楽園へにげる時、ほかの船にしよういだんがおちてしずみましたが、石川さんの船はぶじでした。石川さんは、せんそうはどうしておこるのだろうねと言いました。一ばんつたえたいことを聞く、と、あいてを思いやる心を大切に、ということでした。ぼくは、どうして大人は、こんなおそろしいせんそうをするのかと考えました。ぼくも、あいてを思いやる心を大切にしたいです。みんながそうすれば、へいわなせかいになると思います。

「戦争を自分のこととして感じてほしい」。そんな思いから、古い白黒の写真をカラー写真にする取り組みを、東京大学2年生の齋由志珠さん(19)と、東京大学大学院教授の渡邊英徳さん(46)が続けています。

1945年8月16日に長い戦争が終わり、あれから75年以上がたちました。平和がいつまでも続くように、私たちにできることは何か、一緒に考えていきたいと思っています。

＝2面につづく

カラー化写真が伝える戦争



(カラー化・齋由志珠さん)

2021年5月9日付 さん太タイムズ